

- 2009/03/28 マイクロソフトの「柔らかい帝国主義」
- 2009/03/27 チャンギ空港の無料マッサージ機
- 2009/03/26 王宮博物館の見所
- 2009/03/24 シンガポールの医療商売
- 2009/03/23 学生紛争と留学宣伝
- 2009/03/22 血みどろのゴルカ王宮
- 2009/03/22 マイティリ画のイエス像
- 2009/03/21 ゴルカの落差と格差：美少女の不幸
- 2009/03/21 ゴルカのキリスト教とイスラム教
- 2009/03/21 ゴルカのマオイスト
- 2009/03/19 カトマンズ・デニズンの「水よこせ」デモ
- 2009/03/19 100ルピーDVD革命
- 2009/03/18 イエスはビシュヌ化身となるか？
- 2009/03/18 Copyright-free and/or Human Rights-free
- 2009/03/17 超速ネット・カフェ：カルディ
- 2009/03/17 D. セッデンの連邦制否定論
- 2009/03/16 醜悪な郊外開発
- 2009/03/15 王宮博物館と中日米
- 2009/03/15 学生自治会選挙と市街戦
- 2009/03/15 学生自治会役員選挙
- 2009/03/13 王政復古の可能性
- 2009/03/12 表面化したイスラム問題
- 2009/03/12 停電資本主義
- 2009/03/11 マオイスト憲法案：新民主主義的大統領制へ
- 2009/03/11 恐怖のホーリー祭
- 2009/03/09 シンガポール・チャンギ空港礼讃
- 2009/03/07 赤の回廊
- 2009/03/06 イスラム・アイデンティティ政治へ
- 2009/03/05 コミューン建設に日本人も参加
- 2009/03/04 マオイストの憲法草案：「大きな政府」を目指して



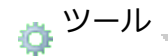
tanigawa さんのプロフィール

ネパール評論

フォト

ブログ

リスト



ツール

ヘルプ

ブログ

<< 最初へ < 前へ

概要

2009/03/19

カトマンズ・デニズンの「水よこせ」デモ



谷川昌幸(C)

世界最先端を行くわがカトマンズで、ついに**デニズン**が登場した（カトマンズポスト、2009.3.18）。ネパール語では何と呼ぶのだろうか？

Denizenとは、EUの外国籍居住者や多重国籍者を指す用語としてつくられたもので、「国家」の権威に挑戦するアナーキーなケシカラン理念。アナーキズムは、日本では明治以来、共産主義よりも危険とされてきた。デニズンはその一派で、フランスにすらまだ実在するかどうか議論されているところだ。

その世界最新デニズンがカトマンズにはすでに実在し、3月17日、「水よこせ」「電気よこせ」デモをやった。もし15日以内に水と電気を配給しなければ、もっとスゴイ要求活動をやる、と本家マオイスト政府に脅しをかけている。そりゃ、マオイストよりもアナーキストの方が過激に決まっている。それはそうだが、世界最新デニズンの要求が「水よこせ」「電気よこせ」だというのが、いかにもネパール的で、マンガチック。

今日（18日）は曇天で、ゴロゴロ鳴り始めた。雷神様が、ネパール・デニズンの心意気を感じて雨を降らせてくれるのではないかな？ そうすれば、水不足も電気不足も軽減される。そして、世界最新デニズン思想が本家マ

•
2008年10月

•
2008年9月

•
2008年8月

•
2008年7月

•
2008年6月

•
2008年5月

•
2008年4月

•
2008年3月

•
2008年2月

•
2008年1月

オイスト政府には通じなくても神様には通じることが、めでたく立証されるわけだ。

あめあめ降り触れ、ネパール・デニズンのために。



上水販売

水不足のカトマンズでは「水」商売が大繁盛。わがホテルでは、配水をトイレ用、洗顔用、温水用の3系統に分けている。トイレ用は茶色の泥水だが、何ら支障はない。カトマンズは、必要に迫られ、エコでも世界最先端になりつつある。

11:45 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [ニュースと政治](#)

100ルピーDVD革命

谷川昌幸(C)

DVDをまた買ってしまった。アカデミー賞作品も宮崎駿もネパールものも、すべて100ルピー。タメルの外に行けばもっと安いかもしれないが、100ルピーでも十分に革命的。ブルジョア的知的財産権に敢然と挑む。さすが、マオイスト本家だ。

2007年12月

•

2007年11月

•

2007年10月

•

2007年9月

•

2007年8月

•

2007年7月

•

2007年6月

•

2007年5月

•

2007年4月

•

2007年3月

•

2007年2月

•



100ルピーDVD販売

11:38 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2009/03/18

イエスはビッシュヌ化身となるか？

谷川昌幸(C)

1. キリスト教プロマイド

カトマンズでは、キリスト教が確実に勢力を拡大している。下図は、あるプロマイド屋さん。従来は、ヒンズー教の神々や仏陀や国王夫妻やドラマが定番だった。ところが、ご覧のように、いまではキリスト教関係が他を圧するほど多くなった。

2. 新宗教の受容

新しい宗教が社会に入っていく場合、先在宗教を克服し完全に取って代わるか、割拠混在するか、先在宗教を取り込むか、あるいは先在宗教に取り込まれてしまうか、そのいずれかであろう。キリスト教の場合、西洋ではサンタクロースなどを取り込み、日本では地鎮祭などを取り込んでいった。逆に、カクレ・キリシタンは、厳しい弾圧で孤立したため、キリスト教というよりは、日本独自の信仰とする説もあるくらい、日本化されている。

3. ヒンズー教の包容力

ヒンズー教は包容力豊かな多神教的偶像宗教であり、様々な伝統宗教を取り込むことにより勢力を拡大して

2007年1月

•

2006年12月

•

2006年11月

•

2006年10月

•

2006年9月

•

2006年8月

•

2006年7月

•

2006年6月

•

2006年5月

•

2006年4月

•

2006年3月

•

いった。キリスト教はヒンズー教を許容できないが、ヒンズー教はキリストを自らの神々の一人として取り込むことができる。キリストが仏陀とともにビシュヌの化身としてヒンズー教の信仰世界に組み込まれ、礼拝されることは、可能なのだ。

キリスト教は日本に入ってきて、日本文化の底知れぬ「古層」により日本化された。多くの日本人にとって、イエスも神々の一人に過ぎない。ヒンズー教世界は日本社会よりもはるかに奥が深い。キリスト教はネパールに入ってきて、ネパール化され、ヒンズー教的キリスト教として定着していくことになるかもしれない。



カトマンズのプロマイド屋さん。キリスト教聖像がヒンズーの神々や仏陀を圧倒している

2006年2月

•

2006年1月

•

2005年12月

•

2005年11月

•

2005年10月

•

2005年9月



横断幕で聖パトリックス祭宣伝

13:37 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [宗教](#)

Copyright-free and/or Human Rights-free

谷川昌幸(C)

1. 著作権なし

ネパールでは、実際には、著作権は保護されていない。DVDビデオが観光客むけで150ルピーで売られている。ハリウッドもの、日本もの、何でもある。芸術は万人のものとする、このネパールの著作権無視政策は正しい。パソコン・ソフトはどうなっているか？ かなり怪しいが、深く追求するとやぶ蛇なので、やめておこう。

2. 「人権なし」との関係

ここでいささか困るのは、現代のブルジョア的権利の核心ともいべき著作権＝知的財産権と人権との関係である。ブルジョア的財産権を保護しなければ、人権も保護されないのか？ つまり両者は「and」関係か、それとも「or」関係なのか？

3. ネパールの現状を見ると

マオイスト元祖中国やマオイスト本家ネパールの現状を見ると、マルクス・レーニン・毛沢東にはまことに申し

訳ないのだが、知的財産権と人権は相関関係にあるといわざるをえない。今回も、copyright-freeのCDやDVDを何枚か買った。これは人権侵害であり、日本税関で没収されても文句は言えない。



過半数がDVDソフト（タメル）

13:22 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2009/03/17

超速ネット・カフェ：カルディ

谷川昌幸(C)

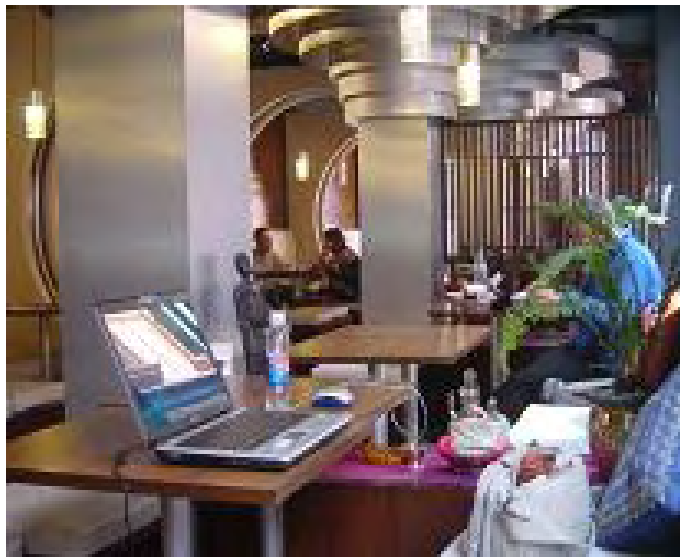
「けえがるね？」さんにそそのかされ、「カルディ」に行った。ビックリ仰天，ネットは超速，驚速，わが大学LANより速い。

大枚7万ルピー(100円=82ルピー)を払い東芝L310を購入，OSとMSオフィス等のソフトのアップグレードをした。これらは巨大ファイルで，日本でも全部のアップグレードには長時間かかる。それがこの「カルディ」では，わずかの時間で完了。これはスゴイ。

途上国には、世界最新と世界最古が共存している。その驚きは体験してみるに限る。**カルディは、軽いで！**



ネットカフェ入口



店内は「蜘蛛の巣」族ばかり

D. セッデンの連邦制否定論

谷川昌幸(C)

David Seddenは、「危機のネパール」(1980)、「ネパール人民戦争」(共編著)等の著作で知られるネパール学の権威。南ロンドン・カレッジ学長。マルクス主義者であり、マオイスト・シンパ。そのセッデン氏が、カトマンズ・ポスト(3/16)に長大なインタビュー記事を寄せ、連邦制を全面的に否定した。

マオイストは、民族やカーストの不満を権力闘争に利用してきたが、これはアイデンティティ政治を招くものであり、きわめて危険である。マオイストはトラを野に放ちそれに乗って権力を取ったが、本当にそれを御すことができるのか？ 以下、セッデン氏の連邦制批判の核心部分をそのまま紹介する。

…………… (以下、引用) ……………

私自身は、連邦制は極めて危険だと考える。連邦制はネパールにとって大きな誤りだ。連邦制は、女性であれダリットであれジャナジャーティであれ、多数派の利益を守るためにも少数派の利益を守るためにも、実際には不要である。彼らの利益は別の方法で守られるはずだ。民族やカーストごとの自治区からなる連邦をつくるという考えは、はなはだ問題であると思う。

また連邦制は、人々が思っているのとは逆に、基本的には反民主主義的である。なぜなら、連邦制は政治を一つの方法——すなわちカーストと民族——によってのみ行うからだ。選択の余地はない。また連邦制は、分裂を引き起こす。いま目にしているとおりだ。マデシは分離し自治州となりうるという主張は、たちまちそれに反対する運動を惹起した。タライに住むが「マデシ」には入れられたくないタルーの人々が、一週間にわたって反対運動をしたのだ。民族による政治は、いつまでも続き終わることのない問題を引き起こすだろう。私は断固主張する——連邦制は不要である。連邦制は望ましくないし、反民主主義的であり、深刻な分裂を引き起こすものである。

…………… (以上, 引用) ……………

以上のセッデン氏の議論に, 私は全面的に賛成だ。が, しかし, ネパール学の権威ともあろうセッデン氏が, なぜ今頃になって, こんなことを言うのか? トラが野に放たれてしまう前に, トラは猛獣だから檻に入れておかないと危険だぞ, となぜ警告しなかったのか?

少々手前ミソだが, この程度のことは, 当初から私は主張してきた。そして, その要点はネパール紙上でも公表した。

Unitary State, Ceremonial Head and Japan's Role in Peace Process

このインタビューのおかげで, 私は反動王制派のレッテルを貼られたが, 最近は少し風向きが変わってきた。単一国家論にせよ儀式王制論にせよ, 耳を傾けてみようという人々が出てきたのである。

ネパールの政治家や知識人は, 欧米の流行理論の無反省な後追いはやめるべきだ。そんなことをしていると, ネパールは怪しげな欧米試作理論の格好の実験場にされてしまうだろう。

20:02 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [憲法](#)

2009/03/16

醜悪な郊外開発

谷川昌幸©

3月15日, ナガルジュン山麓をバラジュからイチャングナラヤン付近まで見てきた。醜悪といわざるをえない。

1. 美しい伝統的家屋

散在するタマンの伝統的家屋は美しい。これは懐古趣味ではなく, 近代以前の人々は経済的には貧しくても美しさを考える時間的余裕があったからだ。日本でも古い村や町は見て美しい。本来なら, その伝統的景観を保存しつつ, 住環境を改善していくべきであろう。

2. 醜い成金住宅

ところが、カトマンズ郊外では、景観も調和も全く考えず、乱雑に見苦しい家が次々に建てられている。大規模住宅開発も行われている。こんなところは、歩いていても疲れるだけだし、人々もネパール人とは思えないほど愛想が悪い。

3. 不動産債券化の勧め

家を建てているのは、おそらく海外出稼ぎ組と新旧特権階級であろう。他に投資すべきものがないので、土地と家に投資する。しかし、実物投資は管理が面倒なので、そのうち不動産債券化を工夫する知恵者が出てきて、不動産バブルの最終局面となるだろう。

4. 雇用創出効果

ただ一つよいことは、こうしたすさまじい不動産開発ブームで雇用が生み出されていることだ。山麓のいたるところで、男女が建設作業に従事していた。

5. 異彩を放つ僧院

ここで異彩を放っているのが、チベット仏教のノーブツェ・ボンポ僧院。山腹に巨大な僧院を建て、多数の修行僧が居住し修行している。村というか町のはずれというか、何の情緒もない集落の商店の店先に、子供僧から20歳前後の青年僧まで多数たむろし、時間つぶしをしている。その前で修行僧たちがマウンテンバイクの曲乗りに興じているのを見ると、ここでも時代の変化を感じざるをえない。

ただ、このような少年～青年たちが多数集まり、集団生活をしていると、団結心はいやでも高まる。チベット仏教僧院は大変お金持ちである。僧院で鍛えられるピューリタンの勤勉と団結心が、民族全体に波及していき、彼らを強力な民族集団にしているのだろう。



タマンの伝統的民家と新築住宅



分譲宅地と建築中の住宅



ノーブツェ・ボンポ僧院

2009/03/15

王宮博物館と中日米

谷川昌幸©

3月13日、王宮博物館に行った。外人特別料金500ルピー。高いが、この国では通例、1年もするとガタガタ、ボロボロになるので、美しい王宮を見るのはいまのうちだ。写真不可だが、すでにネパール人はパチパチ撮りまくっている。

●入場料

ネパール人： 大人 100ルピー
 学生 20ルピー
中国人・SAARC諸国人： 250ルピー
それ以外： 500ルピー
3歳以下： 無料

1. 中国はSAARCと同列以上

この入場料区分からも分かるように、ネパールにとって中国はSAARC、つまりインドと同格である。いや、国王にとってはインド以上であり、そのことを暗示するものが随所に見られた。

一番ビックリしたのは、国王執務室（Gulmi）の執務机の右側壁面に、中国チベット自治区人民政府寄贈のタピストリが掛けられていたこと。ポタラ宮を背景としたものだが、見たところ、単なる観光みやげレベルの品で、寄贈者の名前だけが目立つ。明らかに周囲からこれだけが浮いている。

いつ、どの国王が掛けたのか分からないが、政治的意図は明白だ。私のような一介の外国人であっても、「なるほど、国王のバックには中国がいるのだな」とすぐ気がつく。そうした圧力をかけるため、このいささか場違いなタピストリは掛けられているのだ。

2. 王室つながりの日本

日本の存在感もかなり大きい。小宮山俊画伯の4曲の巨大な「マチャブチャレ」画が掛けられている。それ以外にも、広重の日本画（複製？）や日本関係のものがあちこちに飾られている。

それらにもましてわが愛国心を大いにくすぐったのはダイキン・エアコン。畏れ多くもネパール国王陛下は日本謹製の空気の中で生活されていたのだ。そして、いうまでもなく、日本の皇族との親密な関係の誇示。ネパール王政は、日本天皇家やその取り巻きが支援してきたのだ。

しかし、悲しいかな、日本のプレゼンスはカネ（ダイキン）と封建的・反民主的な王室つながりが中心。ポタラ宮タピストリとは雲泥の差だ。

3. カーリー女神の威を借りる国王

玉座の間（Gorkha）は、さすがに立派だ。国王の威厳を示すための工夫が凝らされている。

その中でも素晴らしいのが、天井の4角から見下ろす8人のカーリー女神像。傑作であり、こんな強力無比の女神様の威を借りて統治すれば、誰でも恐れ入り、平伏するに違いない。案内パンフレットにはわざわざカッコ付きで次の一文が添えてある。

「1990年憲法の公布施行宣言式もまたこのホールで挙行された。」

1990年憲法は、カーリー女神に祝福されていたのだ。

4. 一番人気は虐殺現場

当然といえば当然だが、一番人気は王族殺害事件のあったトリブバンサダン跡。人間は残酷なもので、事件が悲惨であればあるほど、それを喜び、見たがる。「歴史から学ぶ」などとカッコつけるが、本音は、他人の不幸はわが幸福なのだ。だから、事件現場を跡形なく取り壊してしまったのは、後腐れがないように、ということだろうが、観光政策としては、大失敗だ。現場を残しておけば、いまの何倍もの見物客が押し寄せ、国庫を潤していたはずだ。

それでも、「ここでビレンドラ国王が撃たれた」とか、「ここに弾痕あり」などと書かれた案内板の付近には、

黒山の人ばかり。あさましい限りだが、私自身、スケベ心を押さえきれず、「弾痕」を見に行った。

スケベついでに述べておくと、もう一つの人気スポットは、国王夫妻の寝室（Dhankuta）。こちらは「男根」を想像しつつ、老若男女、善男善女が長い列をつくり、スケベ心丸出しで、ダブルベッドを見つめていた。団体見学の小中学生には教育上ハナハダよろしくない。

5. 植民地根性丸出しの王室

全体として、王宮は決して自国の伝統や文化を守るためのものではなく、率先して先進国の権力とカネに屈服し、その猿まねをし、その威を借りて人民を統治するものだ。西洋のまがいものや日本からの借り物が、あちこちにある。これは日本でも同じこと。欧米からは猿まねと見られているに違いない。

それはともかく、王宮博物館は、このままでは1、2年でガタガタ、ボロボロになる。あるいは、もし王政復古ともなれば、再び入れなくなる。王制の因習的、反民主的、植民地的雰囲気味わうには、早く見学に行った方がよい。

6. アメリカン・クラブに手を出すな

王宮博物館はお勧め観光スポットだが、ここで注意すべきは、南隣のアメリカン・クラブ。以前にも何回か注意したが、これは怪しく超危険。うっかり写真でも撮ろうものなら、撃ち殺される。あまりにも腹が立ったので、アメリカン・クラブの西南角から、クラブに背を向け、タメル方面の写真を撮ってやった。

小型デジカメを出すと、ライフルを構えた兵士2人がすっ飛んできて、「こら、撮るな！」と銃で威嚇する。

「いや、撮影禁止はアメリカンクラブであって、タメルではない」と反論し、1枚撮った。それがこの愚作（カンチプルTVの禁酒キャンペーン）。

しかし、こうした行為は大変危険であり、もういつ死んでもよいと覚悟を決めている人以外には、お勧めできない。すでに、うっかりパチリとやった日本人が何人が拘束されている。

アメリカは、傲慢なケシカラン国だ。人権も民主主義もネパール国民の尊厳も完全無視。街のど真ん中に、危険きわまりない施設を設置している。ネパールの国辱だ。なぜマオイストは、こんな植民地的治外法権租界の存在を認めているのか？ 反帝国主義闘争が本気なら、まずここから攻めるべきではないか？

▼アメリカンクラブ(文部省前より)



いる)

(ライフルを持った警備兵が立っ

▼アメリカンクラブ側からタメル方面



(巨大看板は児童飲酒防止キャンペーン)

22:53 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用用](#) | [ニュースと政治](#)

学生自治会選挙と市街戦

15日、ついでにパタン工学部キャンパスの様子を見てきた。日本では大学当局が「自治会をつくり活動せよ」と指導しても、シラケ学生は全く動こうとはしない。ネパールの学生は元気そのもの。学生民主主義はネパールにあり。

と、感心しつつ、乗合バスでラトナ公園まで来たら、全く進まなくなってしまった。仕方なく降りてジャマルまで来たら、やってました。トリチャンドラの学生が校舎屋上からレンガを路上の車や警官に投げ、警官がこれを拾って投げ返す。古き良き日本の学園紛争の頃と同じだ。どの国民も疾風怒濤期を通して成熟していくのだろう。

▼学生自治会選挙ポスター/選挙公約





キャンパス外にも選挙ポスター

▼市街戦(左)で大渋滞(右)



22:41 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用用](#) | [教育](#)

学生自治会役員選挙

谷川昌幸(c)

3月12日夕方、アムリタ・キャンパス前で、統一共産党（UML）系学生集団が壁にビラを貼り、学生自治会（Free Student Union）選挙用の万国旗のような旗を道路の上に渡していた。

壁には कांग्रेस（NC）系のギリジャ氏写真入りのビラも貼ってあったので、それを見ていると、目つきの鋭

い、いかにもコワそうな青年3人が近づいてきて「こいつは極悪人だ」と声をかけてきた。これはイカンと思
い、その上のUML系のビラを見て「あれはマダム・クマールだね」というと、「あいつもワルだ」という。仕方
なく、「プラチャンダ首相はスゴイね」というと、「そうだ、プラチャンダこそがリーダーだ」と迫ってきた。
どうやらマオイスト系がUML系の選挙運動の監視に来ていたらしい。



アムリト・キャンパス前

学生自治会は、もともとUML系が強く、NC系も有力だった。CA選挙でのマオイスト勝利でその力関係がど
う変わったか、興味深いところだが、キャンパスのビラを見る限り、UML系がまだまだ強そうだ。トリチャンド
ラもそうだった。また、パドマカンヤ女子大は、驚いたことにNC系がビラでは他を圧倒していた。



トリチャンドラ図書館前



パドマカンヤ正門 (NC系)



パドマカンヤ正面玄関（UML系）

今日14日は土曜休日なので、キルティプールに行って、そちらの様子を見てきた。ここでは、一番目立ったのはマオイスト系だが、それでもNC系、UML系も頑張っている。ビラがはがされることなく残っているのは、微妙な力の均衡関係にあるからだろう。

大学にも包摂原理で少数民族や被抑圧民族の学生が入っているが、依然として中・上層階級が中心であり、まだまだ相対的に保守的なのであろう。来週の選挙でどうなるか、注目されるところだ。



TUキルティプール（各派ポスター）



右ビル正面（巨大写真はM系）



上ビル・ホール（上段からNC/M/無所属）



キルティプール学生会館（選挙活動中に出て行く学生たち）

0:24 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [教育](#)

2009/03/13

王政復古の可能性

谷川昌幸(c)

この2, 3日, ネパールの人々と話しをしていると, 王政復古がしばしば話題に上る。いま各党要人がインドに行っているが, そこで王政復古が話し合われているというのだ。

王政復古といっても, ギャネンドラ前国王ではなく, 孫か他の元王族の誰かを担いで王位につけるという案である。

その場合、憲法は1990年憲法の改正復活となるか、あるいは国王を完全な象徴とする立憲君主制憲法の制定のいずれかである。1951年の王政復古はラナ将軍家からの大政奉還だったが、もし2度目の王政復古となると、今度は「人民」からの大政奉還となる。本当にそんなことになるのかどうかよく分からないが、どうやら一つの選択肢となってきたことだけは事実らしい。

その背景の一つは、いうまでもなく経済不況。海外出稼ぎ組が解雇され続々帰国してくる。海外送金が激減した上に、失業者が街にあふれる。そこに16時間停電のダメージ。もうウンザリ、王様のほうがまだまし、ということになってきたのだろう。

もう一つは、アイデンティティ紛争が泥沼化しそうな雲行きで、下手をするとタライがカトマンズから分離してしまう。それへの恐れ。こんなことなら、もう一度、御輿に王様を乗せ、とにかく皆で担ごう、ということになったらしい。

国家はアンダーソンがいうように「想像の共同体」。「神」、「人民」「大統領」、「党総書記」など、いずれも不合理な「権威」により成立している。誰を御輿に乗せたらよいか、そこは合理的計算で決めたらよい。

「神」は不合理だが、「神」を選ぶのは、人間の合理的選択である。



旧王宮博物館。多くの学校からクラス単位で見学に来ていた。2009.3.13



旧王宮博物館。入場を待つ人々の長蛇の列。2009.3.13

23:33 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [国王](#)

2009/03/12

表面化したイスラム問題

谷川昌幸(c)

10日、カトマンズに着いたとたん、もう一つ気付いたのが、イスラム問題の表面化だ。これも10日付カトマンズ・ポストに出ている。

1. イスラム全国抗議運動開始

ネパール・ムスリム協会（NMCS）は、3月28日から、全国抗議運動を始めると宣言した。NMCSは、ムスリムが「マデシ」に分類されることを拒否し、全国に居住するムスリムが一つのコミュニティとして政治と社会において正当に代表されることを要求している。

2. ムスリムもタルーも正しい

これは、やはり「マデシ」に分類されることを拒否し激しい反政府運動を展開しているタルー民族の要求と同じものだ。民族自決原理に従えば、タルーもムスリムも文句なしに正しい。

3. アイデンティティ政治へ

10日付カトマンズポストには、シャンギジャでデモをするムスリムの写真が出ている。イスラムらしく、進行方向に向かって右側に男性、左側に女性が列をつくり、スローガンを叫んでいる。

みなムスリム装束であり、迫力がある。タルーや山地諸民族の自治要求よりも、むしろこちらの方が、今後、ネパールの深刻な政治問題になる可能性が大だ。

4. イスラム教改革の記事

ムスリム・アイデンティティ問題と関係があるかどうかわからないが、10日付カトマンズ・ポストには大きなイスラム教改革の記事も掲載されている。

記事はMohna Ansari氏のもので、イスラム教社会における一夫多妻や女性差別を取り上げ、女性の権利を認めるよう改革すべきだ、と訴えている。ネパールへの言及もある。

「ここネパールでは、宗教的な『シャリア法』（イスラム法）を施行せよと要求する人は少ない。」

「よきムスリムであるということと、[女性の] 平等と正義を信じると言うことは、決して矛盾しない。」

この記事自体は、ムスリム・アイデンティティ問題を扱ってはいない。しかし、イスラム教世界において、これは微妙な問題である。それを、この状況の下であえて紙面に掲載する。それは、やはりイスラム教問題への世間の関心が高いからであろう。

ネパールでは、イスラム教はまだ大きな政治問題とはなっていない。しかし、国連や議会諸政党やマオイストが、慎重な上にも慎重に取り扱うべき民族アイデンティティ問題に安直に手をつけたががため、それが覚醒し、取り返しのつかないことになる恐れが出てきた。これこそは、まさしく今後のネパールの取り組むべき本物の問

題となるとみてよいであろう。



カトマンズ（バグバザール）

12:20 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [宗教](#)

停電資本主義

谷川昌幸 (c)

1. 停電革命論の誤り

以前、停電革命論を唱え、停電で困っている人々の鬻鬻を買った。電力依存度が高いのは農村より都市、庶民より有産階級だから、停電により格差が解消され、平等化が促進される、といった趣旨だった。ところが、実際にはそうはならなかった。

今日はカトマンズ滞在3日目。1日16時間停電。もしこれが日本なら、暴動か革命か戦争になっていたろう。政府が倒れてしまうのはいうまでもない。ところが、ここネパールでは、人々はぶつぶつ不平を言いつつも、たいした混乱もなく生活している。私の停電革命論は間違っていた。

2. 停電資本主義

カースト社会を基盤とした資本主義は、それほどヤワではなかった。停電が日常化すると、資本家有産階級は発電機を買い自家発電。これに対し、無産庶民階級は無電力生活に逆戻り。商売でも、発電機投資ができる店はますます繁盛し、そうでない店は没落していく。ネパールでは、停電ですら、資本主義化を促進しているのだ。

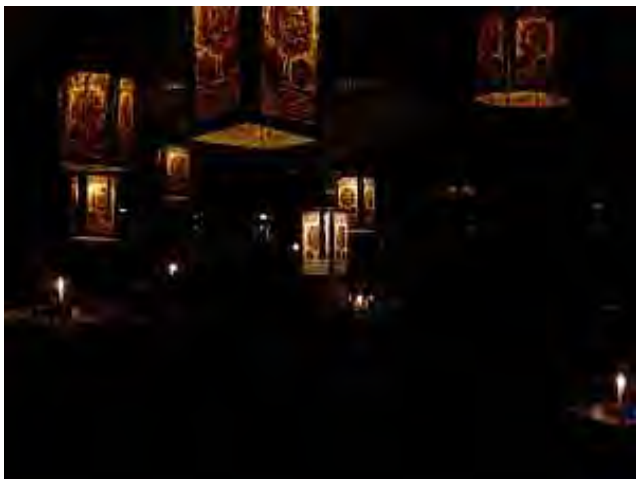
これを支えているのが、依然として残るカースト意識。停電資本主義により生活格差が拡大しても、庶民や貧困層は暴動にも革命にも走らない。ぶつぶつ文句を言いつつも、結局はそれに順応している。

3. 資本主義前衛としての共産党幹部

一方、本来なら停電革命を指導すべき共産主義諸勢力は、議会の2/3を占めながら、彼ら自身が停電資本主義の「勝ち組」となっており、16時間停電の絶好のチャンスを生かそうとはしない。共産党幹部は、自家発電でヌクヌクと暮らし、前衛は前衛でも、共産主義革命ではなく、停電資本主義の前衛となってしまっている。

このネパールが大きく変わるには、犠牲は大きくならざるをえないが、やはり何らかの原理主義革命が必要なのではないだろうか？

下図は、自家発電で営業中のレストラン。客はわれら2人以外は、欧米帝国主義国ブルジョアばかり。満席で繁盛していた。食事代、1人750ルピー。



12:07 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [経済](#)

2009/03/11

マオイスト憲法案：新民主主義的大統領制へ

谷川昌幸 (c)

1. マオイスト憲法案

1時間ほど前、タメルのホテルに着き、ほっと一息入れ、「カトマンズ・ポスト」(3/10)を見たら、Aditya Adhikar氏がマオイストの憲法案（M憲法案）について論評していた。2週間前、バブラム・バタライ蔵相が発表したもので、その概要はすでに紹介したが、かなりショッキングな内容なので、アディカル氏の記事によりつつ改めてコメントしてみよう。

2. 「封建的」「帝国主義的」勢力の政治活動禁止

M憲法案そのものはまだ見ていないので正確なことはいえないが、M憲法案はどうやら人民独裁の新民主主義を基本原理とするらしい。国連、先進諸国が躍起になって宣伝してきた自由民主主義ないし包摂的多党制民主主義ではない。

M憲法案によれば、「封建的」あるいは「帝国主義的」勢力の政治活動は認められない。アディカル氏は、これは必ずしもM憲法案の最大の問題点ではないと述べているが、私には、これこそが新民主主義の核心であり、もしこれが新憲法に成文化されれば、人民独裁の強力な法的根拠となると思われる。

たしかに自由に反対する自由を認めるかどうかは難しい問題だ。しかし、もしM憲法案のような規定を憲法に入れると、「封建的」「帝国主義的」が敵対勢力排除のレッテルとして使用される恐れがある。そのような事例は、歴史上、ソ連、中国などにおいて、無数に見られる。（中国は多党制だが、「封建的」政党や「帝国主義的」政党を排除した結果、事実上、共産党独裁となっている。）

「封建的」かどうか、「帝国主義的」かどうかは、やはり政治の場で民主主義的な闘争により、決着をつけるべき事柄であろう。

3. 議会の諮問機関化

アディカル氏がM憲法案の最大の問題点としているのが、議会の無力化・諮問機関化である。M憲法案は、連邦制と大統領制により立法部から権限を剥奪してしまう法構造になっているという。

M憲法案では、議会は上下二院制である。

上院：国家会議（参議院） 75議席（州、準州から直接選出）

民族、言語、文化、宗教の代表。州関係の調整。

下院：連邦人民代議院 245議席（122議席は直接選挙、123議席は比例制）

大統領決定の承認が主な権限。つまり、諮問機関。

4. 大統領は国民投票

M憲法案によれば、大統領は国家元首であり、政府の長である。国民投票により、51%以上の多数により選出される。51%以上得票できないときは、決選投票。

5. 大統領が内閣選任

国民投票で選出された大統領は、自ら、首相と他の諸大臣を選任する。議会や政党はその選任には関与できない。また、大臣は代議院議員である必要もない。大統領は、誰でも自由に首相や大臣に選任できる。この内閣は、大統領に対して責任を負う。ただし、首相は下院に対しても責任を持つ。

6. 大統領の解任

上院が議員の25%以上が署名した弾劾案を提出し、これを下院が2/3の多数により可決したとき、大統領は解任される。この方法による大統領解任は、実際には非常に難しい。

7. 大統領と裁判所および他の憲法設置機関

大統領は、最高裁判所、憲法裁判所、法務総裁、人権委員会、権力乱用調査委員会などのメンバーを自ら選任する権限を有する。下院は、それらの選任を承認する権限しか持たない。

8. マオイスト独裁へ

これは、強力無比の大統領制である。アディカル氏は大統領を勝ち取った側がすべてを取る「勝者独占体制」だとして、これを批判している。

アディカル氏によれば、この大統領は、強力な大衆組織を持つヘゲモニー政党を生み出すものであり、それを狙っているのはマオイストに他ならない。これにより、マオイストは地域政党や民族政党を吸収してしまおうとしているという。

しかしながら、アディカル氏によれば、マオイストのこの目論見は成功しない。マオイスト大統領制は、地域や民族の諸要求をむしろ助長強化し、中央政府と州政府の間の対立を激化させ、結局は、分離独立の要求へと向かわせることになる。

「M憲法案は、今後マオイストが中央権力を握って強力な国家をつくり、政治的反対勢力による妨害なしに統治することを狙っている。」

しかし、そううまくいくだろうか、とアディカル氏は疑問を呈するのである。

8. 国王以上に強力な大統領

以上に紹介したアディカル氏のM憲法案批判は、論点を的確に捉えている。私も氏の説に賛成だ。

前回、M憲法案の大統領は、国王まがいだと書いたが、正確には国王以上に強力である。大統領は、1990年憲法の国王よりもはるかに独裁的であり、むしろ反民主的、専制的とすら言ってよいだろう。

一体全体、そうしてこのような憲法案ができてしまったのか？ これまでの国連（UNDP、UNMINなど）や西側諸国の憲法支援は、いったい何だったのか？

凶暴なホーリー祭が終わったら、本屋さんにいき「マオイスト憲法案」を買ってこよう。もし本屋さんになれば、マオイスト党本部に行き、研究用として1部いただいてこよう。正確な批判は、もちろんその「マオイスト憲法案」を読んでからとなる。

21:13 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用](#) | [憲法](#)

恐怖のホーリー祭

谷川昌幸 (c)

1. 絹のように

3月10日、シンガポール航空の子会社シルクエアーでカトマンズ着。シンガポール航空機はどれもピカピカ、シルクエアーのA320ももちろん絹のような光沢の新品で快適だった。

2. 非日常としてのホーリー祭

ところが、空港から一歩外に出ると、ホーリー祭。この祭は、無礼講で、通行人に水をかけ、顔に赤や白やらの色を塗りたくってもよいことになっている。

こうした祭の無礼講は日本にもあり、微笑ましく、また楽しいものだ。日常生活では誰でも規則や常識に縛られざるを得ない。祭の無礼講はその日常的拘束を一時的に無視し、規則破りをすることによって、精神を解放し、その健全性を回復するための生活の知恵だ。

3. 凶暴化するホーリー祭

ところが、最近のホーリー祭は、日常を再生復活させるための非日常ではなくなってしまった。

南アジア仕様スズキ車でホテルに向かっていると、街のあちこちで若者が乱闘をしている。そして、そこに制止に入った警官は、捕まえた若者を警棒でめった打ちにしている。これはもはや祭の無礼講ではない。

おそらくこれらの若者や警官は、ホーリー祭を口実に、日頃の憂さを晴らしているのだろう。日常を再生復活させる非日常の祭ではなく、日常の延長としての暴力の恣意的解放に過ぎない。

4. 日常の拡大再生産としてのホーリー祭

非日常としての祭は、日常が秩序的である限りにおいて意味をもつ。毎日が無秩序である社会においては、祭の無礼講は日常の拡大再生産に過ぎない。

21:09 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用用](#) | [文化](#)

2009/03/09

[シンガポール・チャンギ空港礼讃](#)

久しぶりにシンガポール経由でカトマンズに行くことにし、つい3時間ほど前、チャンギ空港についた。シンガポール航空は洗練されていてサスガという感じだし、それ以上に感心したのが、このチャンギ空港。まだ3時間滞在なのに、大好きになってしまった。

1. スワンナプームの植民地根性

同じ新空港ながら、タイのスワンナプーム空港は植民地根性丸出しで、欧米にへつらい、先進諸国と産油国と自国の特権的金持ちのことしか考えていない。

植民地支配されなかったタイが、自ら植民地根性に囚われ、こんな空港をどうして造ってしまったのか、不思議でならない。まさか王様のせいではあるまい。

2. 庶民相手のチャンギ空港

チャンギ空港は哲学が全く違う。ここは普通の旅行者が快適に過ごすことができるように配慮され、合理的に造られている。

時間待ち用のソファやイスは至るところにある。極めて快適。庶民旅行者には待合室がなく、路上生活をせざるをえない、スワンナプームとは、雲泥の差だ。

店舗は庶民旅行者向けが多い。もちろん高級店もあるにはあるが、いかにも植民地といったケバケバしさは全くない。さりげなく店を開き、ごく普通に商売をしている。好感が持てる。

レストランも、スワンナプームのあの特権階級むけ、庶民蔑視のバカらしさの正反対、普通の旅行者を想定した店構えとなっている。

これはシンガポールがすでに先進国になった証拠だ。おそらく中産階級が育ち、彼ら相手の商売をせざるを得なくなったのだろう。

しかも、チャンギ空港がすごいのは、こうして無料ネット端子を使い作業をしているすぐ隣にバーがあり、そこで生演奏をやってくれていることだ。

女性歌手、男性歌手が次々に登壇し、弾き語りをしてくれる。なかなかうまい。これもすべてタダ。信じられない。まさに、地上の天国だ。

21:46 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [旅行](#)

2009/03/07

赤の回廊

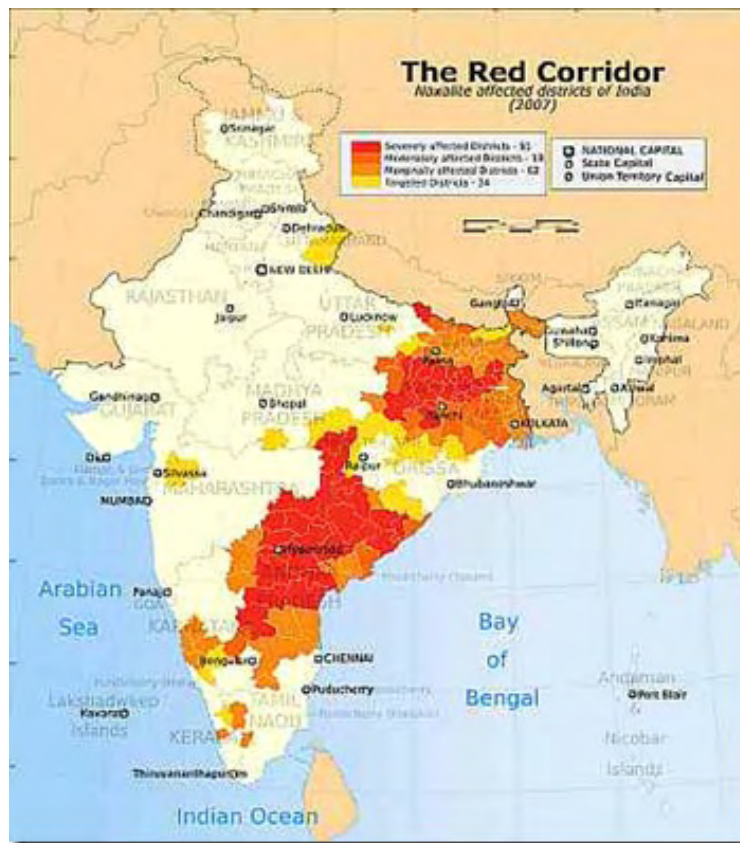
谷川昌幸(C)

インドも燃えている。元祖マオイストは日和見し、米帝の下僕となった。

マオイスト本流は、いまやインドにあり。「赤の回廊」ができつつある。もうすぐ選挙。世界最大の民主主義国で、マオイストはどう闘うか？

ネパール・マオイストは、カトマンズ退廃走資派ではなく、このインド・マオイスト同志とこそ連帯すべきではないか？ 有難いことに、ネパール・ナショナリズムは、国連、NC,UML,そしてマオイスト走資派幹部が野合して根こそぎ破壊してくれた。

南アジア・マオイスト連帯の機は熟した。印ネのマオイストよ、団結せよ!



(RSA,7 Mar)

*この地図は無断拝借。もし著作権に依拠し、ブルジョア的権利を主張されるのであれば、ご一報いただきたい。グローバル資本主義の倫理と論理に従い、ただちに削除する。

9:09 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [マオリスト](#)

2009/03/06

イスラム・アイデンティティ政治へ

谷川昌幸(C)

包摂連邦制の最大の難点は、いうまでもなくアイデンティティ政治であり、その中心がムスリム。彼らの憲法要求をネパリタイムズ (#440) が列挙し、紹介している。

1. アイデンティティを認めよ

記事に紹介されているムスリム団体や著名ムスリムたちは、彼らを「マデシ」や「その他」に分類せず、きちんと「ムスリム」と認定し、権利を認めよ、と要求している。

流行の軽薄包摂連邦制によれば、このムスリムの要求は至極当然であり、彼らのアイデンティティ要求を拒否する根拠はまったくない。

2. イスラム大勢力の誕生

各地に散在するムスリムが、属地主義ではなく属人主義の民族論を採り、ムスリムとして結集すれば、議会でも官庁でも10%程度を占めることができ、強力な政治・社会集団となる。

3. 教育のイスラム化

そして、こうしたアイデンティティ要求は、もちろん学校教育にも波及する。

学校教育は、様々な文化や民族を溶解し一つの「国民」を創り出す巨大な溶解炉であった。「国家国民」は学校教育によって創られてきた。

アイデンティティ政治は、その学校をアイデンティティごとに分割する。そして、その最強のアイデンティティ養成学校となるのが、マドラサだ。

ムスリム諸集団は、イスラム教教育、イスラム教学校の権利要求を強めている。当然だ。軽薄包摂連邦制論がそれを煽っているからだ。

4. イスラム・アイデンティティ政治にたえられるか？

イスラム教は、ヒンドゥー教と異なり、偶像拒否の普遍的理念宗教であり、もっとも強力な属人的宗教だ。いっどこにしようとも、時空を超え、ムスリムはムスリムだ。彼らは、アイデンティティ政治にもっとも適合的で

あり、もっとも強力なアイデンティティ政治を展開しうる。

ヒンドゥー教，仏教，キリスト教，その他諸々の宗教や無神論者，そしてマオイスト唯物論者たちは，この強力なイスラム・アイデンティティ政治と本当に平和共存していけるのだろうか？

21:49 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [民族](#)

2009/03/05

コミュン建設に日本人も参加

谷川昌幸(C)

マオイストは，社会主義から共産主義へ向けて前進すべく，頑張っている。「赤星」(2-4)によれば，西ネパールの革命根拠地はますます発展しているらしい。以下は，その要約。

1. コミュン社会主義に向けて

ネパール革命は，反王制革命の次には完全な反封建制革命を実現し，これを社会主義革命に高めなければならない。ネパール人民の大半は農民なので，農村コミュンこそが革命の進むべき方向だ。

西ネパールのコミュンは，共和国政府の支援で，活発に活動し，マルクス主義・レーニン主義・毛沢東主義・プラチャンダの道，の実現に向けて前進している。モデル・コミュンは，つぎの4つ。

2. モデル・コミュン

(1) Jaljala コミュン (ロルパ) 2002年設立

25家族，125人。コミュン商店，ラバ運送事業，ホテル(宿屋)，コミュン産業，農業。

(2) Ajammari(不死) コミュン (ロルパ) 2004年設立

36家族，141人。事業は(1)と同じ。



殉死者記念道路(RedStar2-4)

5. 国際道路建設協力隊

殉死者記念道路建設には、国際的な協力があった。次の国のジャーナリスト、人権活動家、社会活動家が建設に協力した。

バングラデッシュ, **日本**, ドイツ, イギリス, スウェーデン, フランス, イタリア, アメリカ, ベルギー, スイス, スペイン, イラン, コロンビア, スリランカなど

6. 日本人も革命根拠地建設に協力

マオイストは正直だとすると、革命根拠地づくりには日本人も参加していることになる。これは初耳だ。その日本人が誰かは見当もつかないが、これは大いにあり得ることだ。

いまや日本国政府自身がマオイスト大臣を招待さえするようになった。正義感あふれる日本人がマオイストの「殉死者記念道路」建設やコミュン建設に協力しても、とがめられるはずがない。

日本から**赤旗を立て**、マオイスト・コミュン建設支援隊を送ってもよいくらいだ。

22:17 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2009/03/04

マオイストの憲法草案：「大きな政府」を目指して

谷川昌幸(C)

バブルム・バタライ博士率いる「統一ネパール共産党毛沢東主義派（UCPN-M）」の憲法準備委員会が、党提案の憲法草案の骨格を示した。社会主義的な「大きな政府」を建設するための、意欲的な草案だ。



1. お役所社会主義

マオイスト憲法案は、21部(21編)145条の堂々たる巨大憲法。条文が多いということは、それだけたくさんのお役所があり、「大きな政府」になるということ。

たとえば——監査委員会、女性委員会(男性委員会なし)、ダリット委員会、包摂委員会、開発委員会、州関係調整委員会、最高裁、州裁判所、郡裁判所、憲法裁判所……

スゴイぞ！ 役所がたくさんでき、お役人天国になる。誰が役人になるの？ 誰が給料を払うの？

2. 大統領独裁へ

マオイスト憲法案は、大統領を元首とする大統領制をとり、首相は内政だけを担当することになる。つまり、大統領は国王まがいとなり、民主独裁制に向かう。ネパールには、やはり「王様」が必要なのだ。

3. 高層豪華マンション議会

議会は、堂々の高層豪華マンションとなる。

- ・ 国民院(参議院) 75議席
- ・ 連邦代議院 245議席
- ・ 州議会 25-35議席

- ・ 郡議会
- ・ 村議会

この高層豪華マンション議会の上に、大統領閣下が君臨する。

4. 連邦制の迷路

ネパールは、13州に分けられる。州区分基準は次の通り。——民族、言語、集团的継続性、文化的統一性、歴史的・地理的近隣性、行政的利便性、経済資源の豊かさ。

これらにより、州の領域、名称、人口、構造を決める。そして、これらの州は自決権を持ち、さらに諸民族が自治権、下位自治権を持つのだそう。まるでパズル。数学に弱い日本人にはとても理解できない。

5. 生活完全保障

人民の拍手喝采を浴びそうなのが、生活完全保障。政府は雇用を保障し、万が一失業しても、生活保障手当を支給する。社会主義万歳!

日本はいま経済恐慌の奈落に向かってまっしぐら。失業し衣食住さえままならない人々が急増している。それなのに、資本主義の「小さな政府」は見て見ぬふり、生活保障をお願いしようものなら「自己責任」と冷たく追い返される。

日本はいま、革命か戦争の瀬戸際だ。大げさだといわれるかもしれないが、世論は一夜にして変わる。リースマン『孤独な群衆』を読めば、大衆の危険性がよくわかる。

革命か戦争か——もちろん、革命よりも戦争の可能性の方がはるかに大きい。アメリカが、たとえオバマ大統領になったとしても、資本主義を維持するために戦争(アフガン戦争)を必要としているように、このままでは、日本はかならず世界のどこかで不況対策としての戦争を始める。ソマリア沖か、アフガンか、それともネパールにおいてか?

マオイストの「大きな政府」憲法案は、あまり現実的ではないが、しかし日本の現状を見ると、そう荒唐無稽な

ものともいえないような気がしてくる。全文が入手できたら、もう少しまじめに検討してみたい。

* eKantipur & nepalnews.com, Mar.2.

10:14 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [憲法](#)

- © 2009 Microsoft
- プライバシー
- 使用条件

- 倫理規定
- 迷惑行為のレポート
- スペースの安全な利用
- ヘルプセンター
- アカウント
- ご意見ご感想



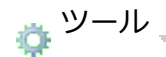
tanigawa さんのプロフィール

ネパール評論

フォト

ブログ

リスト



ツール ▾

ヘルプ

ブログ

次へ > 最後へ >>

概要

2009年4月

2009年3月

2009年2月

2009年1月

2008年12月

2009/03/28

マイクロソフトの「柔らかい帝国主義」



谷川昌幸(C)

マイクロソフト（MS）が、ホットメールを改訂、POP受信を自動化した。このトンデモナイ改悪に、直ちに修正要求を4通も出した。MSの意図は明白。ホットメールを主メーラーとし、他のアドレスの送受信も全部ホットメール経由にしてしまおう、という帝国主義的野望だ。

しかし、私も含め多くのユーザーは、メールは職場や自宅用メールサーバーで管理し、ホットメールは外出時に利用している。MSは、この関係を逆転させ、すべてをホットメールの支配下に置こうというのだ。POPメール受信自動化で、他アドレス宛のものも全部ホットメールで受信され、これを止めることはできない。ホットメールを主メーラーとするか、POP受信を断念するか、の二者択一を迫っているわけだ。私は、このMS帝国主義を批判し、手動POP受信の復活ないし選択制を要求している。

MSが帝国主義的であることは明白だが、この帝国主義は「柔らかい」帝国主義でもある。私のようなうるさいユーザーの要求や批判に耳を傾け、最大限改善する。ブログ改訂の時も問題点をしつこく指摘したら、ほぼ要求通り修正された。

•

2008年10月

•

2008年9月

•

2008年8月

•

2008年7月

•

2008年6月

•

2008年5月

•

2008年4月

•

2008年3月

•

2008年2月

•

2008年1月

•

M Sの帝国主義はケシカランが、こうした柔軟性をもつ限り、M S帝国はなお拡大し続けるだろう。ホットメールの迷惑メール防止はヤフーメールより格段に優れている。あるいは、M Sオフィスは、無料のオープンオフィスがあるにも関わらず、圧倒的なシェアを維持し続けている。わがネパールですら、ほぼすべてがM Sオフィスを使用している。M S帝国が、この「柔らかさ」を失わない限り、その世界支配は当分安泰であろう。

これだけ誉めたのだから、ホットメールのPOP受信手動化（ないし選択制）も、M Sはきっと実現してくれるだろう。大いに期待している。

15:04 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [コンピューターとインターネット](#)

2009/03/27

チャンギ空港の無料マッサージ機

谷川昌幸(C)

シンガポール・チャンギ空港のサービスは、おそらく世界最高だ。英スカイトラックス調査では2位だが（朝日3/27）、旅客満足度では断然1位のはずだ。

明るく清潔な待合室に、快適なソファーとイスがふんだんに配置され、無料パソコンも至る所に設置されている。これだけでも不便で暗くソファーすらない、庶民旅行者蔑視のタイ・スワンナプーム空港との差は歴然である。

しかし、それだけではない。なんと、驚くなかれ、チャンギ空港には最新のマッサージ機が設置され、無料で好きなだけ使用できる。実に爽快。日本の温泉宿ですら、マッサージ機は有料だ。チャンギ空港のサービス精神は、見上げたものだ。タイはむろんのこと、日本でさえシンガポールの足元にも及ばない。

シンガポールは、サービス立国を目指している。小さな都市国家で、土地もなければ、失礼ながらたいした観光資源もない。こんな国が発展するには、重厚長大産業ではなく、金融、情報、流通、教育、医療などのサービス産業に特化せざるを得ない。シンガポールのサービス立国政策は的確だ。

2007年12月

•

2007年11月

•

2007年10月

•

2007年9月

•

2007年8月

•

2007年7月

•

2007年6月

•

2007年5月

•

2007年4月

•

2007年3月

•

2007年2月

•

21世紀は、巨大軍隊をもつ重厚長大国家ではなく、グローバル化に対応した軽快都市国家の時代である。シンガポールは、**経済的にはすでに日本追い抜き**、アジアで最も豊かな国になった。次の目標は、人権と民主主義だ。シンガポールには、ぜひとも**21世紀のアテナイ**となっていたきたい。



無料パソコン（左）、無料LANと電源で持参パソコン使用中（右）

14:37 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [旅行](#)

2009/03/26

王宮博物館の見所

谷川昌幸(C)

王宮博物館については、[すでに訪問記を書いたが](#)、新名所なので、パンフレットを紹介する。

2007年1月

2006年12月

2006年11月

2006年10月

2006年9月

2006年8月

2006年7月

2006年6月

2006年5月

2006年4月

2006年3月


Magic: This room was used to house personal audience used by the Late King Tribhuvan.

Lamjung: This Ramjet hall was used for the special State Banquet to be given in honor of the visiting Heads of the States and other similar party to be organized on special occasions associated with the kings and queens.

Gulmi: This room was the Private Office of the then King.


Dipading: Room to wear and for the thinking.

Dhankuta: The Bull Room used by former king.



The Bull Room of the former king.

Dhawal: This hall was used for organizing "teeka" ceremony and offering "teeka" to the high ranking officials on the occasion of Vijaya Dashami and also for conducting an installation ceremony.



Dhawal Hall.

Tribhuvan Sadan: This hall built during the reign of Tribhuvan had many rooms. This was the place where the "Royal Palace Museum" took place on 1 June 2001 AD (2058 B.S.) in this place the bullets were fired on the then king Tribhuvan, queen Ashwarya, crown prince Dipendra, Shree, Nagesh and some other members and relatives of the royal family. This building was dismantled after the incident.


Garden: The garden is renowned with blooming of rare varieties of plants and many of beautiful flowers. The revolving shade (ghumanghur) and the rounded house (ghor) existed in the area were used for visiting the garden and water fountain around. The round house was also a place for official meeting and reporting to the king.

GENERAL INFORMATION

Entrance Fees-

1. Nepal citizens	Rs. 100
2. Nepal Students	Rs. 20
3. The Chinese National and SAARC Countries	Rs. 250
4. Others	Rs. 500

Free Entrance for the children (upto 3 years old).




Museum Visiting Hour

1. Kartik 15 to Magh 15 (Winter) From 11 AM to 3 PM
2. Magh 16 to Kartik 15 From 11 AM to 4 PM
3. The museum will remain closed on Tuesday, Wednesday and public holidays.


Ticket Counter Schedule

Kartik 15 to Magh 15 (Winter) the ticket counter will be open from 11 AM to 2 PM
 Magh 16 to Kartik 15, the ticket counter will be open from 11 AM to 3 PM.



Government of Nepal
Ministry of Culture & State Restructuring

NARAYANHITI PALACE MUSEUM



Durbar Marg
Kathmandu, Nepal
Tel: 01-4227844
Fax: 01-4226603

ここで注目すべきは、入場料区分。

1. ネパール市民 (国民)
2. ネパール人学生
3. 中国人およびSAARC諸国 (国民)
4. その他

ご覧のように「**中国人The Chinese National**」が、堂々の第3番目、SAARCの前に置かれている。この「中国人」はどこまで含むのか？ もし中国人全部だとすると、これはスゴイことだ。まだ確かめてはいないが、こんな例はなかったと思う。ゴルカ王宮で入場料区分を確認してみたが、こんな扱いにはなっていなかった。

2006年2月

•

2006年1月

•

2005年12月

•

2005年11月

•

2005年10月

•

2005年9月

それとも一つ、国王の寝室とベッドが、見所として堂々とパンフレットに掲載されている（左上写真）。健在の元国王の使用していたものであり、あまりにも生臭い。どうしてこんなものが「博物館」の名所となるのか？ 節操がない。こんなことでは、いつまでたっても「紳士の国」（後日論及）たり得ない。



入場券。外国人425番目。500ルピー（約625円）

12:11 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2009/03/24

シンガポールの医療商売

谷川昌幸 (C)

カトマンズからシルクエア（シンガポール航空系）に乗ると、「シンガポール観光局保健サービス部」のパンフレット（38ページ）が全員に配布される。いぶかりつつ見ると、これはシンガポールでの病気治療の宣伝であった。

「まえがき」によると、シンガポールの医療はWHO基準でアジア随一、世界中の人々が、多文化多言語環境の下で安心して高度の医療サービスを受けられるという。

この「まえがき」に続き、シンガポールで、いかに快適に高度な医療を受けたかの体験談が、いくつか紹介され

ている。ホーチミンから来た老人は、「外国人なのに、お医者さんも看護師さんも私と家族を暖かく迎え、治療方法を詳しく親切に説明し、すばらしい治療をしてくれた」と感謝している。アラスカの中年女性は、アメリカではMRIが25~37万円といわれたが、シンガポールでは5万円だった。「シンガポールは外国人患者を大切にす。小さな国だが、医療はすばらしい。これからはアメリカ人がもっともっと治療を受けに来るに違いない。」

同種の宣伝は、シルクエア機内誌「Silkwinds」やシンガポール航空機内誌「Silverkris」にも掲載されている。Silverwindsによると、

- ・ 1000人の国際的資格を持つ医者
- ・ 年間370万人の患者
- ・ 19万7千件の手術

だそうだ。合理的というか、露骨というか、要するに、病気治療を安く上手にしてあげるから、シンガポールにいらっしやい、ということだ。

シンガポールの医療水準や治療費が世界的に見てどの程度か、についての知識は全くない。しかし、この徹底した合理主義からして、宣伝に偽りはなく、おそらく高度の医療サービスをreasonableな費用で受けられるのだろう。

シンガポールは、よいところに目をつけた。人間の生命、健康こそ、最高の商品であり、合理主義に徹すれば、これはよい商売になる。シンガポールは医療サービス立国を目指すことにしたのだ。

今後は日本の患者も日本を見限りシンガポール、あるいはそれに続くタイやインドに治療を受けに行くようになるだろう。素人の勘にすぎないが、すでにいくつかの分野では、これらの国の医療サービスの方が上のようだ。ネパールの病院にさえ、世界的権威といってよい医者が何人かいる。

日本のサービスは医療でも教育でも劣化著しい。日本の学校は、まもなく見捨てられるだろう。子供たちは、日本の学校をパスし、外国の学校に行くようになる。そして、次は病院だ。アジア諸国は、物をつくるよりも、優秀な医者や教師を育成し、先進国から患者や生徒を集める方が手っ取り早い。シンガポールはそこに気づき、医

療商売や教育商売を始めたのだ。

が、しかし、である。シンガポールの高度な医療サービスを受けられるのは、誰か？ ネパールではそれは、政治家や金持ちに限られる。アメリカや日本でも、いずれそうなるであろう。医療や教育を合理化すれば、地域の公共医療や公教育は崩壊し、多数の犠牲の上に少数エリートの利益が図られるようになるであろう。

医療も教育もサービスには違いないが、地域社会から隔離して提供されるようなものではない。それらは、地域社会と共にあるべきものだ。だから、ネパールの政治家は、シンガポールやタイやインドの医療がいかに優れていようと、国民を後に残し、これらの国へ病気治療に行くべきではない。同様に、将来、シンガポールの医療が日本医療を大きく凌駕するようになって、日本の政治家はシンガポールに治療に行くべきではない。

政治家が、抜け駆けで、自分の病気治療や子供の教育を外国に求め始めたとき、国は滅びる。シンガポールの医療サービス宣伝を見たとき、直感的、本能的に、いや～な感じがしたのは、病気を商売の種にしているからというよりは、それを反共同体的と感じたからであろう。



チャンギ空港（シンガポール）

2009/03/23

学生紛争と留学宣伝

谷川昌幸(C)

ネパールの学生組合（組織）は、各政党の別働隊であり、しょっちゅう衝突している。その名所の一つが、パドマカンヤ女子大学前。この付近には法学部や言語学部など多くのキャンパスがあり、市街戦の名所となっている。投石など危険なので市街戦中は近づくべきではないが、戦闘終了後に行けば、武器として使用されたレンガ、石、タイヤの燃え残りなどが散乱し、平和ボケ日本人には十分市街戦の恐怖を感じさせてくれる。

この市街戦の名所は、また海外留学宣伝の名所でもある。見よ、この巨大宣伝を！ このような海外留学（脱国・棄国）の売国的宣伝に埋もれ、それらを破壊するでもなく、特権的政党幹部に操られ、投石市街戦を繰り返す学生たちの矮小さ。彼らが本当に愛国ナショナリストなら、同胞を的にする前に、これらの教育搾取宣伝看板をこそ投石の標的にすべきではないか？



市街戦後のPK正門前。警察車両と女性警官（右、後ろ姿）。右上には巨大な海外留学宣伝看板（豪、ニュージーランド、米、英）



上記看板の向かい側。留学宣伝看板の氾濫。

19:27 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [教育](#)

2009/03/22

血みどろのゴルカ王宮

谷川昌幸 (C)

ゴルカ王宮（旧王宮）は、ゴルカの町から急な石段を1時間ばかり登った険しい尾根の上にある。春霞で何も見えなかったが、晴天であれば、マナスルをはじめヒマラヤの山々が一望できる絶好の位置にある。

ここは（旧）王宮であり、もちろんヒンズー教の聖地でもある。行者たちが修行しており、牛食い外人と知りつつ、祝福を受けよと、かなり強引に呼びかけてくる。登ったのは金曜午前であり、参詣者はあまり多くなかった。祭礼の日であれば、さぞかし多くの善男善女が訪れるのであろう。その証拠に、王宮への参道沿いには茶店がいくつも店を構え、路上ではお供え用の花や山羊も売っていた。

そして、すさまじかったのが、犠牲の動物たち（山羊など）の血。大量の血の染みこんだ石段が延々と王宮へと続いている。その犠牲の動物たちの血を踏みしめながら、王宮へと登っていくわけだ。一段登るごとに、その犠牲の動物たちの生命と血と肉で私は生かされていることをいやでも自覚させられる。厳粛たらざるをえない。そして、その頂点に君臨するのが、王宮である。支配の空間構成としても、よくできている。

王制廃止以前は、ここは王宮の一つであり、王族のためヘリポートも用意されていた。庶民の参詣も制限されていたのだろう。王制が廃止された現在、ここはうまく開発すれば、絶好の観光地となるだろう。下々は、どの国の人であれ、王様が大好きなのだから。



王宮への参道。犠牲の動物の血染めとなっている。



王宮



この鐘の手前で犠牲が捧げられる



行者

23:41 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

マイティリ画のイエス像

谷川昌幸(C)

今日は、ショッキングな絵を見た。マイティリ画は、マイティリ女性たちが主にヒンズー教のテーマに基づき壁に描いてきたものだ。ピカソを思わせる画風で、本物には実に素晴らしいものがある。20年ほど前、手漉紙に描いたものだが、マイティリ女性の手になるマイティリ画を何枚か手に入れた。研究室に飾ってあるが、みな素晴らしいと誉めてくれる。単なるおみやげではないからだ。

今日、あるところに立ち寄ったら、そのマイティリ画の手法で、十字架のイエスが描かれた絵が展示されていた。これはショックだった。マイティリ画=ヒンズー教絵画ではないであろうが、いくらなんでも十字架のイエスをマイティリ画で描くことはなかろう。それとも、マイティリ女性はキリスト教に改宗し、壁にイエスや聖母マリアを描きはじめたのだろうか？

(補足)

日本のカクレ・キリシタンの「マリア観音」は、過酷な弾圧を逃れる便法であった。それが長期化し、独自の信仰形態に変容してきたのだ。マイティリ画のイエス像はどこか違うようだ。伝統文化がキリスト教を取り込む、あるいは逆にキリスト教が伝統文化を取り込むということは、どこでも見られる。その意味では、マイティリ画のイエス像やマリア像が描かれても不思議ではない。

そのうち、キリスト教マンダラ、カトリック・マンダラなども出回るだろう。それはそれでよいのだが、しかし、どうも釈然としない。

23:21 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2009/03/21

ゴルカの落差と格差：美少女の不幸

谷川昌幸(C)

ゴルカの町（バスターミナル付近）と、その上下の村との高度格差と生活格差には、目がくらくらする。バスターミナル付近は、電気、水道が普及し、生活はカトマンズや日本の地方都市と大差ない。この十数年で急速に近代化したのだろう。

ところが、そこから急勾配の踏み分け道を20～30分も登ると、電気も水道もない民家がたくさんある。ゴルカの女性はみな美しい。これらの家の美しい少女や主婦たちが、重い水瓶を右手で腰のところに抱え、あるいはドッコに乗せ、転げ落ちそうな急坂をあえぎ、あえぎ登ってくるのを見ると、胸が痛む。

水場のある眼下のバス・ターミナル付近が急発展しなければ、これら美少女たちの生活は苦しくとも幸せであったであろう。しかし、いまは幸せとは到底思われぬ。眼下の町では蛇口をひねれば水が出て、炊飯器でご飯を炊き、テレビを楽しむことができる。空いた時間には美しい服を着て、友人たちと外出もできる。眼下の町との生活格差は、高度落差以上にはなはだしい。幸せでいられるはずがない。

このゴルカでは、そして他の大部分の地方では、マオイズムは決して時代錯誤でもなければユートピアでもない。この生活格差を救済するには、革命的变化によらざるをえない。日本も欧米も、みな血なまぐさい暴力革命

により近代化してきたのだ。

たしかに暴力革命は犠牲が大きく、避けることができれば、それにこしたことはない。しかし、この目もくらむような高度落差の国の絶望的生活格差を見ると、平和的改良の難しさに、だれしも途方にくれざるをえないだろう。



ゴルカ・バスターミナル



水運びの村の美少女 2 人



山腹の民家（バスターミナルから約20分）

15:16 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [社会](#)

ゴルカのキリスト教とイスラム教

谷川昌幸 (C)

ゴルカの町にも、キリスト教会らしきものがあった。マオイスト・アーチから少し入った道路沿いにホサンナ・マンダリ/Hosanna Churchの看板が掛けられている。外から見ただけなので、どの会派の教会で、どのような活動をしているのかは分からない。また、町では、イスラム教徒にもときどき出会った。カトマンズ・ムグリン間の川向かいの村にはたしかにモスクがあった。ゴルカにもあるのだろうか？

宗教は多くの人々にとってアイデンティティの核心をなしており、様々な宗教があるのは当然だ。日本にも神道、仏教、キリスト教、その他の宗教など、無数といってよいほどある。だから多宗教は自然なのだが、その一方、宗教は心情の動員力が強く、しばしば大きな社会的軋轢を生み出し、紛争をもたらす。その解決方法として広く認められているのが政教分離だが、しかし、これはなかなか難しい。日本でも、靖国神社問題がことあるごとに表面化する。

ネパールにキリスト教やイスラム教や仏教諸派などが入ってきて布教活動をするのは自然なことだし、止められない。しかし、状況によっては、既存社会との軋轢を生み、紛争を引き起こすことも考えておかなければなら

ない。特に先進諸国の人々は、自分たちが激しい残虐きわまりない宗教弾圧を経験してきたことを忘れてはならないだろう。



ホサンナ教会



押しても引いても鞭打ってもここを動かない牛

15:06 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [宗教](#)

ゴルカのマオイスト

谷川昌幸 (C)

バブラム・バタライ氏に敬意を表し、ゴルカの状況調査に行ってきた。道路は、カトマンズ・ムグリン間もムグリン・ゴルカ間も、最近改修されたらしく、予想以上に良かった。特にポカラ分岐点からゴルカまでは、バブラム道路かな(?)と思うほど快適だった。ネパールにも政治道路があるのだろうか?

ゴルカは初めて。山腹の小さな町だが、この近辺の村々の中心らしく、屋根にまで乗客を満載したバスがかなり頻繁に通っており、バザールもにぎわっていた。町も周辺の村々もカラカラに乾燥し、赤煉瓦色の土はサラサラの粉末状となり、一面を覆っている。水は豊富で、いくつも水場があるが、各戸への水道は普及していないらしく、大きな水瓶を持った少女たちが急坂をあえぎあえぎ登ってくる。過酷な労働であり、水の貴重さが身にしみる。

ゴルカはバブラム・バタライ氏の本拠だが、マオイストのポスター類は意外に少ない。町の入り口には、例のマオイスト・アーチが設置されていたが、ポスター類はUMLのものもNCのものもある。夕方、数十台のバイクと乗客満載のバス2台と、武装警官満載の車両が登ってきた。マオイストと警戒の武装警官らしい。バイク隊は凶暴そのもの、そしてバス満載のYCL（たぶん）も大声でシュプレヒコールを叫んでいた。こんな夕方から何をするのかと見ていると、小型トラックに乗り換え、停電で薄暗い村々を回って、オルグをやっているらしい。遠くの村の方面から、シュプレヒコールが聞こえてくる。やがてゴルカの町に戻ってきて、ホテル下の広場で解散となった。こんな圧力を掛けられたら、村人は抵抗できないだろう。

ただ、ネパールの不思議なところは、先にも述べたように、他勢力が根絶されるのではなく、共存していることだ。軍駐屯地があり兵隊だらけだし、シャハ王家のゴルカ王宮には熱心な信者の参詣が絶えない。高級ホテル（といっても1室15ドル）では、朝7時からお偉いさんが車で参集、チャッカリ兼朝食兼選挙運動（？）をやっていた。警察幹部らしい人も一緒だった。ヒマラヤは、春霞のため全く見えなかった。





ゴルカ (2009.3.20)

0:39 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2009/03/19

カトマンズ・デニズンの「水よこせ」デモ

谷川昌幸(C)

世界最先端を行くわがカトマンズで、ついに**デニズン**が登場した(カトマンズポスト、2009.3.18)。ネパール語では何と呼ぶのだろうか？

Denizenとは、EUの外国籍居住者や多重国籍者を指す用語としてつくられたもので、「国家」の権威に挑戦するアナーキーなケシカラン理念。アナーキズムは、日本では明治以来、共産主義よりも危険とされてきた。デニズンはその一派で、フランスにすらまだ実在するかどうか議論されているところだ。

その世界最新デニズンがカトマンズにはすでに実在し、3月17日、「水よこせ」「電気よこせ」デモをやった。もし15日以内に水と電気を配給しなければ、もっとスゴイ要求活動をする、と本家マオイスト政府に脅しをかけている。そりゃ、マオイストよりもアナーキストの方が過激に決まっている。それはそうだが、世界最新デニズンの要求が「水よこせ」「電気よこせ」だというのが、いかにもネパール的で、マンガチック。

今日(18日)は曇天で、ゴロゴロ鳴り始めた。雷神様が、ネパール・デニズンの心意気を感じて雨を降らせて

くれるのではないかと？ そうすれば、水不足も電気不足も軽減される。そして、世界最新デニズン思想が本家マオイスト政府には通じなくても神様には通じることが、めでたく立証されるわけだ。

あめあめ降れ触れ、ネパール・デニズンのために。



上水販売

水不足のカトマンズでは「水」商売が大繁盛。わがホテルでは、配水をトイレ用、洗顔用、温水用の3系統に分けている。トイレ用は茶色の泥水だが、何ら支障はない。カトマンズは、必要に迫られ、エコでも世界最先端になりつつある。

11:45 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用意](#) | [ニュースと政治](#)

100ルピーDVD革命

谷川昌幸(C)

DVDをまた買ってしまった。アカデミー賞作品も宮崎駿もネパールものも、すべて100ルピー。タメルの外に行けばもっと安いかもしれないが、100ルピーでも十分に革命的。ブルジョア的知的財産権に敢然と挑む。さすが、マオイスト本家だ。



100ルピーDVD販売

11:38 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用用](#) | [文化](#)

2009/03/18

イエスはビシュヌ化身となるか？

谷川昌幸(C)

1. キリスト教プロマイド

カトマンズでは、キリスト教が確実に勢力を拡大している。下図は、あるプロマイド屋さん。従来は、ヒンズー教の神々や仏陀や国王夫妻やドラマが定番だった。ところが、ご覧のように、いまではキリスト教関係が他を圧するほど多くなった。

2. 新宗教の受容

新しい宗教が社会に入っていく場合、先在宗教を克服し完全に取って代わるか、割拠混在するか、先在宗教を取り込むか、あるいは先在宗教に取り込まれてしまうか、そのいずれかであろう。キリスト教の場合、西洋ではサンタクロースなどを取り込み、日本では地鎮祭などを取り込んでいった。逆に、カクレ・キリシタンは、厳しい弾圧で孤立したため、キリスト教というよりは、日本独自の信仰とする説もあるくらい、日本化されている。

3. ヒンズー教の包容力

ヒンズー教は包容力豊かな多神教的偶像宗教であり、様々な伝統宗教を取り込むことにより勢力を拡大して

いった。キリスト教はヒンズー教を許容できないが、ヒンズー教はキリストを自らの神々の一人として取り込むことができる。キリストが仏陀とともにビシュヌの化身としてヒンズー教の信仰世界に組み込まれ、礼拝されることは、可能なのだ。

キリスト教は日本に入ってきて、日本文化の底知れぬ「古層」により日本化された。多くの日本人にとって、イエスも神々の一人に過ぎない。ヒンズー教世界は日本社会よりもはるかに奥が深い。キリスト教はネパールに入ってきて、ネパール化され、ヒンズー教的キリスト教として定着していくことになるかもしれない。



カトマンズのブロマイド屋さん。キリスト教聖像がヒンズーの神々や仏陀を圧倒している



横断幕で聖パトリックス祭宣伝

13:37 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [宗教](#)

Copyright-free and/or Human Rights-free

谷川昌幸(C)

1. 著作権なし

ネパールでは、実際には、著作権は保護されていない。DVDビデオが観光客むけで150ルピーで売られている。ハリウッドもの、日本もの、何でもある。芸術は万人のものとする、このネパールの著作権無視政策は正しい。パソコン・ソフトはどうなっているか？ かなり怪しいが、深く追求するとやぶ蛇なので、やめておこう。

2. 「人権なし」との関係

ここでいささか困るのは、現代のブルジョア的権利の核心ともいべき著作権＝知的財産権と人権との関係である。ブルジョア的財産権を保護しなければ、人権も保護されないのか？ つまり両者は「and」関係か、それとも「or」関係なのか？

3. ネパールの現状を見ると

マオイスト元祖中国やマオイスト本家ネパールの現状を見ると、マルクス・レーニン・毛沢東にはまことに申し

訳ないのだが、知的財産権と人権は相関関係にあるといわざるをえない。今回も、copyright-freeのCDやDVDを何枚か買った。これは人権侵害であり、日本税関で没収されても文句は言えない。



過半数がDVDソフト (タメル)

13:22 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2009/03/17

超速ネット・カフェ：カルディ

谷川昌幸(C)

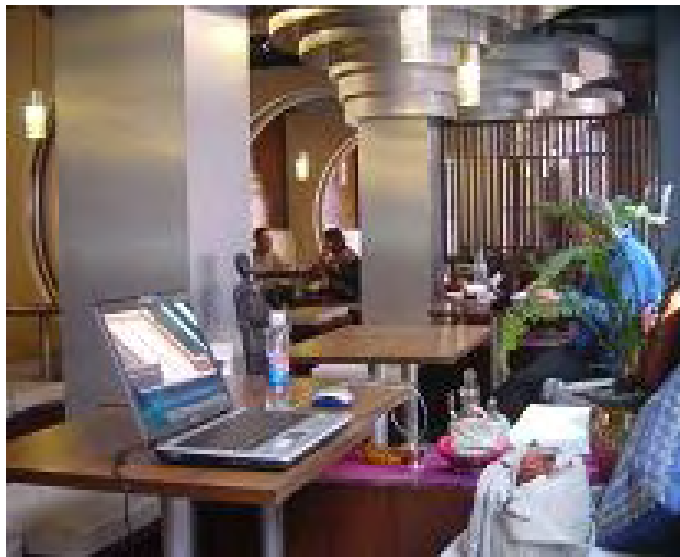
「けえがるね？」さんにそそのかされ、「カルディ」に行った。ビックリ仰天、ネットは超速、驚速、わが大学LANより速い。

大枚7万ルピー(100円=82ルピー)を払い東芝L310を購入、OSとMSオフィス等のソフトのアップグレードをした。これらは巨大ファイルで、日本でも全部のアップグレードには長時間かかる。それがこの「カルディ」では、わずかの時間で完了。これはスゴイ。

途上国には、世界最新と世界最古が共存している。その驚きは体験してみるに限る。**カルディは、軽いで！**



ネットカフェ入口



店内は「蜘蛛の巣」族ばかり

D. セッデンの連邦制否定論

谷川昌幸(C)

David Seddenは、「危機のネパール」(1980)、「ネパール人民戦争」(共編著)等の著作で知られるネパール学の権威。南ロンドン・カレッジ学長。マルクス主義者であり、マオイスト・シンパ。そのセッデン氏が、カトマンズ・ポスト(3/16)に長大なインタビュー記事を寄せ、連邦制を全面的に否定した。

マオイストは、民族やカーストの不満を権力闘争に利用してきたが、これはアイデンティティ政治を招くものであり、きわめて危険である。マオイストはトラを野に放ちそれに乗って権力を取ったが、本当にそれを御すことができるのか？ 以下、セッデン氏の連邦制批判の核心部分をそのまま紹介する。

…………… (以下、引用) ……………

私自身は、連邦制は極めて危険だと考える。連邦制はネパールにとって大きな誤りだ。連邦制は、女性であれダリットであれジャナジャーティであれ、多数派の利益を守るためにも少数派の利益を守るためにも、実際には不要である。彼らの利益は別の方法で守られるはずだ。民族やカーストごとの自治区からなる連邦をつくるという考えは、はなはだ問題であると思う。

また連邦制は、人々が思っているのとは逆に、基本的には反民主主義的である。なぜなら、連邦制は政治を一つの方法——すなわちカーストと民族——によってのみ行うからだ。選択の余地はない。また連邦制は、分裂を引き起こす。いま目にしているとおりだ。マデシは分離し自治州となりうるという主張は、たちまちそれに反対する運動を惹起した。タライに住むが「マデシ」には入れられたくないタルーの人々が、一週間にわたって反対運動をしたのだ。民族による政治は、いつまでも続き終わることのない問題を引き起こすだろう。私は断固主張する——連邦制は不要である。連邦制は望ましくないし、反民主主義的であり、深刻な分裂を引き起こすものである。

…………… (以上, 引用) ……………

以上のセッデン氏の議論に, 私は全面的に賛成だ。が, しかし, ネパール学の権威ともあろうセッデン氏が, なぜ今頃になって, こんなことを言うのか? トラが野に放たれてしまう前に, トラは猛獣だから檻に入れておかないと危険だぞ, となぜ警告しなかったのか?

少々手前ミソだが, この程度のことは, 当初から私は主張してきた。そして, その要点はネパール紙上でも公表した。

Unitary State, Ceremonial Head and Japan's Role in Peace Process

このインタビューのおかげで, 私は反動王制派のレッテルを貼られたが, 最近は少し風向きが変わってきた。単一国家論にせよ儀式王制論にせよ, 耳を傾けてみようという人々が出てきたのである。

ネパールの政治家や知識人は, 欧米の流行理論の無反省な後追いはやめるべきだ。そんなことをしていると, ネパールは怪しげな欧米試作理論の格好の実験場にされてしまうだろう。

20:02 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [憲法](#)

2009/03/16

醜悪な郊外開発

谷川昌幸©

3月15日, ナガルジュン山麓をバラジュからイチャングナラヤン付近まで見てきた。醜悪といわざるをえない。

1. 美しい伝統的家屋

散在するタマンの伝統的家屋は美しい。これは懐古趣味ではなく, 近代以前の人々は経済的には貧しくても美しさを考える時間的余裕があったからだ。日本でも古い村や町は見て美しい。本来なら, その伝統的景観を保存しつつ, 住環境を改善していくべきであろう。

2. 醜い成金住宅

ところが、カトマンズ郊外では、景観も調和も全く考えず、乱雑に見苦しい家が次々に建てられている。大規模住宅開発も行われている。こんなところは、歩いていても疲れるだけだし、人々もネパール人とは思えないほど愛想が悪い。

3. 不動産債券化の勧め

家を建てているのは、おそらく海外出稼ぎ組と新旧特権階級であろう。他に投資すべきものがないので、土地と家に投資する。しかし、実物投資は管理が面倒なので、そのうち不動産債券化を工夫する知恵者が出てきて、不動産バブルの最終局面となるだろう。

4. 雇用創出効果

ただ一つよいことは、こうしたすさまじい不動産開発ブームで雇用が生み出されていることだ。山麓のいたるところで、男女が建設作業に従事していた。

5. 異彩を放つ僧院

ここで異彩を放っているのが、チベット仏教のノーブツェ・ボンポ僧院。山腹に巨大な僧院を建て、多数の修行僧が居住し修行している。村というか町のはずれというか、何の情緒もない集落の商店の店先に、子供僧から20歳前後の青年僧まで多数たむろし、時間つぶしをしている。その前で修行僧たちがマウンテンバイクの曲乗りに興じているのを見ると、ここでも時代の変化を感じざるをえない。

ただ、このような少年～青年たちが多数集まり、集団生活をしていると、団結心はいやでも高まる。チベット仏教僧院は大変お金持ちである。僧院で鍛えられるピューリタンの勤勉と団結心が、民族全体に波及していき、彼らを強力な民族集団にしているのだろう。



タマンの伝統的民家と新築住宅



分譲宅地と建築中の住宅



ノーブツェ・ボンポ僧院

2009/03/15

王宮博物館と中日米

谷川昌幸©

3月13日、王宮博物館に行った。外人特別料金500ルピー。高いが、この国では通例、1年もするとガタガタ、ボロボロになるので、美しい王宮を見るのはいまのうちだ。写真不可だが、すでにネパール人はパチパチ撮りまくっている。

●入場料

ネパール人： 大人 100ルピー
 学生 20ルピー
中国人・SAARC諸国人： 250ルピー
それ以外： 500ルピー
3歳以下： 無料

1. 中国はSAARCと同列以上

この入場料区分からも分かるように、ネパールにとって中国はSAARC、つまりインドと同格である。いや、国王にとってはインド以上であり、そのことを暗示するものが随所に見られた。

一番ビックリしたのは、国王執務室（Gulmi）の執務机の右側壁面に、中国チベット自治区人民政府寄贈のタピストリが掛けられていたこと。ポタラ宮を背景としたものだが、見たところ、単なる観光みやげレベルの品で、寄贈者の名前だけが目立つ。明らかに周囲からこれだけが浮いている。

いつ、どの国王が掛けたのか分からないが、政治的意図は明白だ。私のような一介の外国人であっても、「なるほど、国王のバックには中国がいるのだな」とすぐ気がつく。そうした圧力をかけるため、このいささか場違いなタピストリは掛けられているのだ。

2. 王室つながりの日本

日本の存在感もかなり大きい。小宮山俊画伯の4曲の巨大な「マチャブチャレ」画が掛けられている。それ以外にも、広重の日本画（複製？）や日本関係のものがあちこちに飾られている。

それらにもましてわが愛国心を大いにくすぐったのはダイキン・エアコン。畏れ多くもネパール国王陛下は日本謹製の空気の中で生活されていたのだ。そして、いうまでもなく、日本の皇族との親密な関係の誇示。ネパール王政は、日本天皇家やその取り巻きが支援してきたのだ。

しかし、悲しいかな、日本のプレゼンスはカネ（ダイキン）と封建的・反民主的な王室つながりが中心。ポタラ宮タピストリとは雲泥の差だ。

3. カーリー女神の威を借りる国王

玉座の間（Gorkha）は、さすがに立派だ。国王の威厳を示すための工夫が凝らされている。

その中でも素晴らしいのが、天井の4角から見下ろす8人のカーリー女神像。傑作であり、こんな強力無比の女神様の威を借りて統治すれば、誰でも恐れ入り、平伏するに違いない。案内パンフレットにはわざわざカッコ付きで次の一文が添えてある。

「1990年憲法の公布施行宣言式もまたこのホールで挙行された。」

1990年憲法は、カーリー女神に祝福されていたのだ。

4. 一番人気は虐殺現場

当然といえば当然だが、一番人気は王族殺害事件のあったトリブバンサダン跡。人間は残酷なもので、事件が悲惨であればあるほど、それを喜び、見たがる。「歴史から学ぶ」などとカッコつけるが、本音は、他人の不幸はわが幸福なのだ。だから、事件現場を跡形なく取り壊してしまったのは、後腐れがないように、ということだろうが、観光政策としては、大失敗だ。現場を残しておけば、いまの何倍もの見物客が押し寄せ、国庫を潤していたはずだ。

それでも、「ここでビレンドラ国王が撃たれた」とか、「ここに弾痕あり」などと書かれた案内板の付近には、

黒山の人ばかり。あさましい限りだが、私自身、スケベ心を押さえきれず、「弾痕」を見に行った。

スケベついでに述べておくと、もう一つの人気スポットは、国王夫妻の寝室（Dhankuta）。こちらは「男根」を想像しつつ、老若男女、善男善女が長い列をつくり、スケベ心丸出しで、ダブルベッドを見つめていた。団体見学の小中学生には教育上ハナハダよろしくない。

5. 植民地根性丸出しの王室

全体として、王宮は決して自国の伝統や文化を守るためのものではなく、率先して先進国の権力とカネに屈服し、その猿まねをし、その威を借りて人民を統治するものだ。西洋のまがいものや日本からの借り物が、あちこちにある。これは日本でも同じこと。欧米からは猿まねと見られているに違いない。

それはともかく、王宮博物館は、このままでは1、2年でガタガタ、ボロボロになる。あるいは、もし王政復古ともなれば、再び入れなくなる。王制の因習的、反民主的、植民地的雰囲気を楽しむには、早く見学に行った方がよい。

6. アメリカン・クラブに手を出すな

王宮博物館はお勧め観光スポットだが、ここで注意すべきは、南隣のアメリカン・クラブ。以前にも何回か注意したが、これは怪しく超危険。うっかり写真でも撮ろうものなら、撃ち殺される。あまりにも腹が立ったので、アメリカン・クラブの西南角から、クラブに背を向け、タメル方面の写真を撮ってやった。

小型デジカメを出すと、ライフルを構えた兵士2人がすっ飛んできて、「こら、撮るな！」と銃で威嚇する。

「いや、撮影禁止はアメリカンクラブであって、タメルではない」と反論し、1枚撮った。それがこの愚作（カンチプルTVの禁酒キャンペーン）。

しかし、こうした行為は大変危険であり、もういつ死んでもよいと覚悟を決めている人以外には、お勧めできない。すでに、うっかりパチリとやった日本人が何人が拘束されている。

アメリカは、傲慢なケシカラン国だ。人権も民主主義もネパール国民の尊厳も完全無視。街のど真ん中に、危険きわまりない施設を設置している。ネパールの国辱だ。なぜマオイストは、こんな植民地的治外法権租界の存在を認めているのか？ 反帝国主義闘争が本気なら、まずここから攻めるべきではないか？

▼アメリカンクラブ(文部省前より)



いる)

(ライフルを持った警備兵が立っ

▼アメリカンクラブ側からタメル方面



(巨大看板は児童飲酒防止キャンペーン)

22:53 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事引用](#) | [ニュースと政治](#)

学生自治会選挙と市街戦

15日、ついでにパタン工学部キャンパスの様子を見てきた。日本では大学当局が「自治会をつくり活動せよ」と指導しても、シラケ学生は全く動こうとはしない。ネパールの学生は元気そのもの。学生民主主義はネパールにあり。

と、感心しつつ、乗合バスでラトナ公園まで来たら、全く進まなくなってしまった。仕方なく降りてジャマルまで来たら、やってました。トリチャンドラの学生が校舎屋上からレンガを路上の車や警官に投げ、警官がこれを拾って投げ返す。古き良き日本の学園紛争の頃と同じだ。どの国民も疾風怒濤期を通して成熟していくのだろう。

▼学生自治会選挙ポスター/選挙公約





キャンパス外にも選挙ポスター

▼市街戦(左)で大渋滞(右)



22:41 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を用用](#) | [教育](#)

学生自治会役員選挙

谷川昌幸(c)

3月12日夕方、アムリタ・キャンパス前で、統一共産党（UML）系学生集団が壁にビラを貼り、学生自治会（Free Student Union）選挙用の万国旗のような旗を道路の上に渡していた。

壁には कांग्रेस（NC）系のギリジャ氏写真入りのビラも貼ってあったので、それを見ていると、目つきの鋭

い、いかにもコワそうな青年3人が近づいてきて「こいつは極悪人だ」と声をかけてきた。これはイカンと思
い、その上のUML系のビラを見て「あれはマダム・クマールだね」というと、「あいつもワルだ」という。仕方
なく、「プラチャンダ首相はスゴイね」というと、「そうだ、プラチャンダこそがリーダーだ」と迫ってきた。
どうやらマオイスト系がUML系の選挙運動の監視に来ていたらしい。



アムリト・キャンパス前

学生自治会は、もともとUML系が強く、NC系も有力だった。CA選挙でのマオイスト勝利でその力関係がど
う変わったか、興味深いところだが、キャンパスのビラを見る限り、UML系がまだまだ強そうだ。トリチャンド
ラもそうだった。また、パドマカンヤ女子大は、驚いたことにNC系がビラでは他を圧倒していた。



トリチャンドラ図書館前



パドマカンヤ正門 (NC系)



パドマカンヤ正面玄関（UML系）

今日14日は土曜休日なので、キルティプールに行って、そちらの様子を見てきた。ここでは、一番目立ったのはマオイスト系だが、それでもNC系、UML系も頑張っている。ビラがはがされることなく残っているのは、微妙な力の均衡関係にあるからだろう。

大学にも包摂原理で少数民族や被抑圧民族の学生が入っているが、依然として中・上層階級が中心であり、まだまだ相対的に保守的なのであろう。来週の選挙でどうなるか、注目されるところだ。



TUキルティプール（各派ポスター）



右ビル正面（巨大写真はM系）



上ビル・ホール（上段からNC/M/無所属）



キルティプール学生会館（選挙活動中に出て行く学生たち）



0:24 | [固定リンク](#) | [トラックバックの表示 \(0 件\)](#) | [この記事を引用](#) | [教育](#)

- © 2009 Microsoft
- プライバシー
- 使用条件

- 倫理規定
- 迷惑行為のレポート
- スペースの安全な利用
- ヘルプセンター
- アカウント
- ご意見ご感想